

は少弐頼尚の子冬資であることが明らかである。したがって『歴代鎮西志』の記述をそのまま信じることはできない。

五 九州探題今川了俊と宇都宮氏の乱

今川了俊の九州上
陸と太宰府陥落

斯波氏経が帰洛したあと、洪川武蔵守義行が鎮西大將軍として派遣されたが、備中・備後まで下向したものの、九州へ渡海できないまま、帰京してしまった。

応安三年（二三七〇）七月一日、国東の幕府小番衆田原氏能へ、今川伊予守貞世入道了俊が九州へ下向することを告げ、十月、佐田経景へも次の手紙を送って協力を依頼した。

九州の事、仰せ付けられ候の間、罷り下るべく候、最前御合力候ハバ、殊に御忠たるべく候、然らば、日ごろの御忠節、今度いよいよ御賞（しょうかん） 翫（か）あるべく候也、恐々謹言

（応安三年）
十月廿七日

了俊（花押）

宇都宮因幡大膳亮殿（佐田経景）

（『佐田文書』原文は漢文）

今川了俊は、九州進発にあたって、前の大將軍洪川義行の失敗にかんがみて慎重に作戰計画を立てた。すなわち、一族の者を豊後と肥前に上陸させ、その地の武士を糾合（きうごう）して太宰府へ向かい、了俊自らは少し遅れて正面から門司へ渡り、豊前・筑前を経て、太宰府で一族の者たちと合流し、懐良親王方を壊滅させるというものであった。

了俊は京都出發にあたって、備後・安芸の守護職を兼任して、両国の軍勢を動員し、更に、周防・長門の守護大内弘世と婚姻関係を結んでその協力を得て、その強大な軍事力に頼るところ大なるものがあつた。

応安四年（一三七二）六月、了俊は子息義範を備後尾道から、船で豊後高崎城に向かわせた。

豊後では、このころ大友氏ちゆうとく継から親世ちかよへ家督が移り、氏継が南朝方へ走るといふ事件があつた。足利義満―細川頼之ラインが守護クラスの大家の家督問題に介入したらしい。今川了俊は

「京都の御さたのおもむきをしり候ハぬ人々」が、これを不満に思つて、氏継とともに南朝側へ走つたと述べている（『入江文書』卯月十五日付）。

菊池武光は、高崎城の今川義範軍を包囲して、翌応安五年（一三七二）正月までの半年間に、一〇〇余度も合戦を繰り返した。

今川義範が豊後へ向かつた翌月、了俊の弟仲秋（国泰・頼泰・入道仲高）も尾道を

船出し、十一月、肥前松浦に上陸し、松浦党の支援を得て、肥前の各地で戦い、応安五年二月、烏帽子岳うぼうしだけで戦つて、菊池次郎武政を破り、軍を筑前に進めた。

今川了俊は、応安四年十月に入つて長門国に到着し、十二月、門司へ渡海した。これを聞いた菊池武光は高崎城の包囲を解いて、軍を太宰府へ返し、肥後との連絡路を確保して、太宰府の維持に努めた。

応安五年二月、今川了俊の軍は、筑前麻生山の多良倉・鷹見岳（八幡西区カ）攻めにかかり、少弐冬資や大内弘世の奮戦によつて、両城を抜き、太宰府に近い高宮に陣をしき、肥前長島庄ながしまから蟻打あなひへ進出してきた弟仲秋の来陣を待った。同年八月、菊池肥前守武安を筑後酒見城で退けた仲秋軍は、菊池武安を追つて筑前に



今川了俊の花押

入り、了俊の軍と合流して、両者は一挙に太宰府攻撃に移った。

応安五年八月十二日、太宰府は陥落し、懷良親王・菊池武光らは、筑後高良山へ移った。このあと、大内弘世ら中国勢は帰国した。

城井常陸前司

『入江文書』に次の史料がみえる。

入道の拳兵

田原下野権守氏能軍忠の事

宇都宮常陸入道謀叛により、霜台（今川氏兼）御発向の間、急速に馳せ参ずべきの旨、仰せ下しにより、時日を廻らさず参陣せしめ、去る二月廿三日より、豊前の御陣において堪忍せしめ、連日野臥り合戦の時、親類若党、毎度疵を被りおわんぬ、爰に去る八月廿八日の夜、豊後国の凶徒、同国北浦辺の花岳に忍び上り、城郭を構え、豊後・豊前両国の通路を塞ぐの間、事延引せば天下の御大事たるべきにより、惣領大友方（親世）より度々の注進につき、彼の城に馳せ向うべきの由、霜台の御意をもって、不日、彼の在所へ罷り向い、去る九月六日の暁、当城花岳へ押寄せ、散々合戦を致し、親類若党数十人、疵を被るといへども、同日対治仕り、時剋を移さず、城井帰陣せしめ、宿直を致すの処、同廿五日、高畑城を没落するの間、霜台の御共を致す（下略）

応安七年十月 日

「承り了ぬ（今川氏兼）
（花押）」

（原文は漢文）

すなわち、応安七年（二三七四）正月、城井守綱が南朝方となり、今川了俊に敵対したため、豊前守護今川彈正少弼（了俊の弟）氏兼（了俊の弟）から依頼を受けた大友親世の軍勢催促を受けて、豊後国東郡（くじまき）の大友一族田原氏

能は二月二十三日から参陣した。

正月末日、城井は焼き払われ、守綱らは城郭へ追い入れられ長期戦の様相を呈し始めていた（『草野文書』）。田原氏能は連日の野臥のふせり合戦で、三月三日に四人、同二十八日に二人、八月十三日に七人の負傷者を出す小競り合いを続け、九月二十五日、守綱が高畑城（築城町松丸付近カ）から姿を消すまで忠節を尽くした。

その間、八月二十八日には、豊後勢の後方を遮断するため、大友氏継方が、田原庶家直平らを花岳（豊後高田市・山香町境）に挙兵させたので、田原氏能は帰国し、花岳を攻めて一六人の負傷者を出す奮戦で攻略し、また城井の陣へとって返したという。

高畑城の戦いには、備後の武士長井貞広も、今川氏兼に従って参陣し、自身負傷している（『萩藩閩閩録』所収「福原文書」三八号）。

宇都宮常陸入道を『豊前宇都宮興亡史』の小川武士氏は城井八代目の直綱とする。川添昭二氏は『今川了俊』（昭和三十九年刊）で直綱としたが、『九州探題今川了俊の軍事活動』で守綱と推定し、『南北朝期の豊前国守護について』で、山口隼正氏は守綱と想定している。

城井守綱は『宇都宮佐田氏系図』によると、関東宇都宮惣領家貞綱の子で、鎌倉に生まれ、幼少にして、城井頼房の子として育てられ、大和弥や六と称したらしい。城井頼房は大和守に任官する前は薩摩六郎左衛門尉と言われたようだから、これにちなんで、大和弥六左衛門尉と称し、元徳元年（二三二九）十二月以前に、城井氏惣領となつたらしい。正慶二年（二三三三）には常陸介に任官し、北条高時の一字をいただいたのか高房と言った。建武元年（二三三四）十月には、常陸前司冬綱と言ひ、文和三年（二三五四）九月には守綱を

称している。足利直冬の家来と見られるのを避けて改名したらしい。『紀井宇都宮系図』では、貞治五年（一三六六）二月三日、京都にて、七十歳で没したとなっている。

守綱の次の家綱も、実は関東宇都宮公綱の子で、常陸介を称し、応安三年（一三七〇）八月九日、六十歳で京都において没したという。

その子直綱は管領細川頼之と不和で、義満にもうとまれたという。

幕府の細川頼之―今川了俊ラインが大友家・少弐家に重要な変化を与えたように、宇都宮城井氏にも、幕府に対して反発を招く原因を作り出したに違いない。もう一つの大きな疑問は、二代にわたって、関東宇都宮家から城井家督を迎えていることである。それほど、関東宇都宮家の統制力が強いのか、それとも、関東宇都宮氏の鎌倉幕府内や、室町幕府内での地位を利用して、肥後守護代や筑後守護職を獲得しえたのであるか。

水島の陣（菊池氏への攻撃）

宇都宮常陸入道が没落した翌永和元年（一三七五）八月、今川了俊は筑後川を渡って、陣を水島に進め、菊池氏の本拠地隈府へ最終的な攻撃をかけようとして大軍を集結させていた。

今川了俊は、大友親世・島津氏久・少弐冬資の出陣を求めたが、少弐冬資が出陣しなかったため、島津氏久をして説得させ、ようやく姿を見せた。了俊は酒宴の席で弟仲秋に命じて、少弐冬資を刺殺させた。冬資はこれ以前から、強権を行使する了俊を快く思わなかった。冬資の父頼尚と一色道猷が対立したように、了



足利義満の花押

俊は少弐氏の領国筑前・豊前などを確実に脅かしていたからである。

面目を失った島津氏久は帰国し、南朝方に替わり、以後一〇余年間、了俊の九州統一を妨げた。大友親世も帰国したため、隈府攻撃は中止せざるを得なくなり、探題軍は筑後川の北岸へ撤退し、作戦の練り直しをすることになった。

第三節 大内・大友氏の豊前国進出

一 大内義弘の豊前入国

大内義弘の九州出陣 少弐冬資暗殺と水島の陣撤退後、再び大内氏が九州へ出陣し、今川了俊の九州平定事業を手助けする。

大内氏の九州渡海の最初は、これより一二年ほど前、斯波氏経の要請にこたえて、大内弘世が渡海し、いったんは豊前を掌中にすることに成功したが、翌年、二度目の出兵は、馬ヶ岳に敗戦し、香春岳で孤立して降参し、辛うじて帰国したものである。今川了俊の太宰府占領後帰国していた大内弘世へ、再び出兵を促したが、安芸方面での戦鬪に意を注いでいた弘世はこれにこたえず、大内弘世と不仲となっていた子息の義弘が、父の意向に逆らって、永和元年（一三七五）十二月ごろ、弟の満弘とともに三〇〇騎ほどの兵を率いて